

判断を止めていたのは、「判断」ではなく 「その後の人生」だった

A Case Study of Decision-Making maybe Delayed until People Become Ready to Accept the Consequences of Their Decisions

01 Executive Summary

本セッションでは、12名の参加者が「人生で最も怖かった判断」を共有し、その判断プロセスを観察した。

一般的には、「人は重要な判断になるほど迷い、判断が重くなる」と考えられることが多い。

しかし、本セッションで観察された現象は異なっていた。

参加者は、何を選ぶべきか分からなかったのではなかった。

むしろ、自分が選ぶべき方向性は既に理解していた。

判断を遅らせて、その判断によって生まれる結果を、自ら引き受ける覚悟であった。

さらに興味深かったのは、一度判断した後、

参加者の多くは結果を他者の責任にはせず、自分自身の人生として意味づけ続けていたことである。

本ケースは、「判断停止」は判断能力の問題ではなく、判断後の結果を受け入れる準備と深く関係している可能性を示唆している。

02 Background

対象

RUMIOS Community

参加者

12名

テーマ

人生で最も怖かった判断

観察方法

本ケースは、セッション中の対話、参加者の提出フォーム、およびファシリテーターによる観察をもとに分析を行った。

03 Key Observations

Key Observation 1

参加者は「判断できなかった」ではなかった

参加者が語った判断は多岐にわたった。

- 海外転勤
- 転職
- 解雇
- 役員職受け入れ
- 育休からの復帰
- 養子・出産

しかし、どのケースでも共通していたのは、
「何を選ぶべきか全く分からなかった」という語りではなかった。

多くの参加者は、自分がどちらへ進みたいかを既に理解していた。
判断が止まっていたのは、選択肢ではなく、その選択が人生にもたらす影響だった。

Interpretation

本ケースでは、「判断できない」という状態よりも、
「判断した後に起こる変化を引き受けられるか」という葛藤が繰り返し観察された。
判断停止は、選択肢の不足ではなく、判断後の未来への責任と結び付いていた可能性がある。

Key Observation 2

判断は、「覚悟」が整うまで保留されていた

参加者の語りには、それぞれ異なる葛藤があった。

- ある参加者は家族との関係を。
- ある参加者はキャリアを。
- ある参加者は子どもとの時間を。

失うかもしれないものを何度も考えていた。

しかし、それは判断を避けるためではなかった。

「その結果を受け入れる準備」が整うまで、判断を保留していたのである。

Interpretation

本ケースでは、判断は情報不足によって遅れていたのではなかった。

「どちらを選んでも失うものがある」という現実を受け入れるまでの時間が、判断までの時間となっていた。

Key Observation 3

判断した後は、「正解」を語るのではなく、「意味」を語っていた

振り返りでは、次の言葉が複数の参加者から語られた。

「今から思えばどちらも正解だった」

「決断したあとにどう生きるかが大切だった」

「失ったものもあったが、得たものもあった」

誰一人として、

「正しい判断だったから幸せになった」とは語らなかった。

Interpretation

参加者は、判断そのものを評価していたのではなかった。

判断後の人生に、自ら意味を与え続けていた。

判断とは、正解を選ぶ行為ではなく、選んだ人生を引き受ける行為として語られていた。

04 Discussion

本ケースで観察されたのは、「怖い判断」ではない。

人は、いつ判断を引き受ける覚悟を持つのかという現象である。

参加者は判断能力を欠いていたわけではなかった。

判断を保留していたのは、その結果を引き受ける覚悟が整っていなかったためである。

また、一度判断した後は、その結果を他者や環境の責任にすることなく、
自らの人生として意味づけ続けていた。

これは、意思決定を「正解を探す行為」としてではなく、
「選んだ人生を引き受ける行為」として捉える視点の存在を示している。

本ケースは、判断停止の背景には、情報不足や能力不足だけでは説明できない、「結果を引き受ける覚悟」という要素が存在する可能性を示唆している。

05 Implications for Organizations

組織では、重要な意思決定に対して、
「早く決めること」「迷わず行動すること」が求められる場面は少なくない。

しかし、本ケースで観察されたのは、
判断の遅さが能力不足によるものではないという点である。

人は、自らの判断がもたらす結果を受け入れる準備が整うまで、意思決定を保留することがある。

もし組織が意思決定を支援したいのであれば、「どちらを選ぶべきか」を教えるだけでは十分ではない。

- 判断後に何を失い、何を得る可能性があるのか
- そして、その結果を本人がどう引き受けられるのか

そこまで含めて支援することが、意思決定を前へ進める一助となる可能性がある。

06 Limitations

本報告は一回のコミュニティセッションを対象としたケーススタディであり、結果を一般化することはできない。

今後は、異なる年代、職種、ライフステージにおける判断事例を継続的に観察することで、「判断」と「結果を引き受ける覚悟」との関係について、さらに検討を進める必要がある。

判断停止は、能力の問題ではない。

判断後の人生を、引き受ける覚悟の問題である。
